

樋口 一葉

——「われから」の構成——

金 森 真 紀

一

「われから」(『文芸倶楽部』明29・5)は、一葉が発表した最後の完結した小説であるが、一葉の代表作とされる「にぎりえ」(『文芸倶楽部』明28・9)、「たけくらべ」(『文学界』明28・1～明29・1)に比べ、その評価は低い。『めさまし草』(明29・5・25)の「小説通」評が「一葉としては太く劣りたる作」と挙げたことから、一般に失敗作と見られている。しかし「小説通」評が必ずしも正しいものとは限らないのではないか。また一概に失敗作と判断して良いものか。など疑問が残る。低い評価の原因となった『めさまし草』「小説通」の指摘は次の通りである。

お美尾が上とお町が上とを、殆んど等分にか、れ

たるより、力負けとも云ふものにや、話の筋は先づ作者の手よりこんがかりはじめて、何を主とも定かならぬやうになり了りたり。

母子二代にわたる宿命が題材にされている作品ではあるが、飽くまでも町が主人公として展開されているために、このような批評が成されるのは当然のことであろう。しかし同じ『めさまし草』で「ひいき」が、

お美尾與四郎が上をも、や、詳しくものしたるは、第九回のお町神前に我が未來を危ぶむところに呼應せしめんがためなり。

と述べている箇所注目してみると、一葉が意図的に母の美尾と娘の町の部分を等分に描いたとも考えられる。

二

『めさまし草』の「ひいき」評に関連して、正太夫(斎藤緑雨)が、一葉自身に「われから」の作意を質問した様子が、「みつの上日記」(明29・5・29)に記述されている。稲荷社前での町の物思いについて、「ひいき」(幸田露伴)の意見である、「……我れもいつしか母と同じき運命に廻り逢ふ事なからすやとの念かしこにいたらぬ前より有しもの……」また緑雨の意見である、「……眞に偶然の出来事として描かれたる物なるへし……」の両者を提示し、一葉の真意がどちらに該当するか尋ねているものである。それに対して一葉は、誠にこれは偶然の出来事なりしかれとも常々おのれも知らぬ心のそこに怪しうひそむ物のありて心細き感¹は常々有しに相違なかるべく

と両者とも含む立場を示している。この一葉の答えに關して、坂本政親氏が「へ作品論 われから」の中で、そこにお町の悲しい宿命を見つめようとする態度、ひいては自己の運命にもそぞろに思いを馳せている一葉の内面の姿さえ偲ばれるのである。

〔国文学解釈と教材の研究〕第2巻第11号、昭32・10)と述べており、物思いと宿命の関係を挙げている。「ひ

いき」評の通り、稲荷社前の町の物思いと母の美尾の運命には、多大な関連があるものと考えられる。したがって、主人公町の宿命を描く一過程に過ぎないはずの美尾の部分までもにも重点を置いた一葉の作意を、把握する端緒になるのではないか。

水の流れ、山のたゞずまい、松の木がらし小高き聲も唯その昔のまゝ、成けり、……(略)……夜あらしさつと喜連格子に音づるれば、人なきに鈴の音からんとして、幣束の紙ゆらぐも淋し。(九)

これは「ひいき」が指摘した稲荷社前の部分である。座敷内の恭助の誕生日祝いの騒ぎとは、全く対照的で、淋しさと共に、もの悲しさまでも含んだ町の不安な心情が表現されており、後に辿る不幸を予め示しているかのようである。また、町が「私は貴君に捨てられは爲ぬかと存じまして、夫れで此様に淋しう思ひまする」(九)と自分の行末を予見しており、町不幸が宿命的なものであったと考えられる。

宮城達郎氏は「われから」の中で「血の宿命のようなものが感じられ、因果の理法が示されている。」と述べ、また坂本政親氏も「われから」の主^{注1}題として、「へ作品論 われから」の中で「お町の不義を通して抵抗の女を描くと見せ、実は血統の宿命にねらいがあ

る」^(注2)と述べており、両氏とも「血の宿命」を挙げ、作品の主眼点としている。貧困のため、欲望の満たされることがない生活から脱出し妾となった美尾の運命。生活に恵まれてはいても、親に愛情を注いで貰えず、そのうえ、夫からも真の愛情を受けることが出来なかった町の運命。この両者が実に対照的に描かれ「血の宿命」が感じられる。前者を「現実脱出」とし、後者を「不幸な結末」とすると、相互間には因果関係が結ばれていると考えて良いのではないか。

「現実脱出」と「不幸な結末」をモチーフとした作品は、「われから」以前に発表された「雪の日」(『文学界』明26・3)、「にこりえ」、「わかれ道」(『国民之友』明29・1)にも見られる。次にその三作品を順に挙げてみたい。

(1) 「雪の日」

「現実脱出」——珠は家柄の不釣合を理由に反対された恋愛を貫くために、母親同然の伯母、そして故郷を捨て家を出た。

「不幸な結末」——伯母は娘同然に育ててきた珠の行動を悲嘆し、不埒の客となってしまう。珠自身も「悔の八千度その甲斐もなけれど、……」(『雪の日』)に

見られるように、結局幸せを得られず、自分の軽率な行動を嘆き後悔している。

(2) 「にこりえ」

「現実脱出」——

あの小さな子心にもよく／＼憎くいと思ふと見えて私の事をば鬼々といひます、……空を見あげてホツと息をつくさま、堪へかねたる様子は五音の調子にあらはれぬ。(三)

より、お力の源七一家を不幸にしまったことへの後悔が見られ、また

つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれが、あ、嫌だ／＼

(五)

とあるように、お力は現実生活への反発心を覚え、丸木橋を渡りきること、つまり理想の世界へ脱出することを望んでいる。

「不幸な結末」——源七の妻お初は一家の幸福のみを切望し、貧しさにも耐えてきた。しかし、お力が詫びの気持ちを含めて太吉に与えた「かすていら」が原因となり、太吉を連れて家を出てしまう。そのうえ、

源七とお力を謎の死に追い込ませている。

(3) 「わかれ道」

「現実脱出」——お京は、

人のお初穂を着ると出世が出来ないと言ふでは無いか、今つから延びる事が出来なくては仕方が無い、(上)

とあるように、繰り返し「出世」を口に出しており、終には、

私は洗ひ張に倦きが來て、最うお妾でも何でも宜い、何うで此様な詰らないづくめだから、(下)

と妾になることを決心する。

「不幸な結末」——「お前は不人情で己れを捨て、行し、最う何も彼もつまらない、」(下)、「人をつけ、最う誰れの事も當てにする物か、」(下)とあるように、吉三の純真な心は姉のように慕っていたお京の「現実脱出」によって、傷付けられてしまう。

以上三作品の題材はそれぞれ異なるが、結局は、「現実脱出」と「不幸な結末」が追求されており、その解決の緒を求め試行錯誤が繰り返されていたのである。

よって「われから」も、その試行錯誤の一過程であったと考えられる。「われから」での「現実脱出」と「不

幸な結末」の問題には、親と子の関係が題材として取り挙げられたのである。

三

「われから」において、「現実脱出」と「不幸な結末」両者に重点が置かれた要因として、一葉自身が実際に「現実脱出」を試みようとする要素を備えていたこと、また、身をもって「不幸な結末」を経験していたことも、挙げられるのではないか。

まず本章では「現実脱出」と一葉との関連性について考えてみたい。

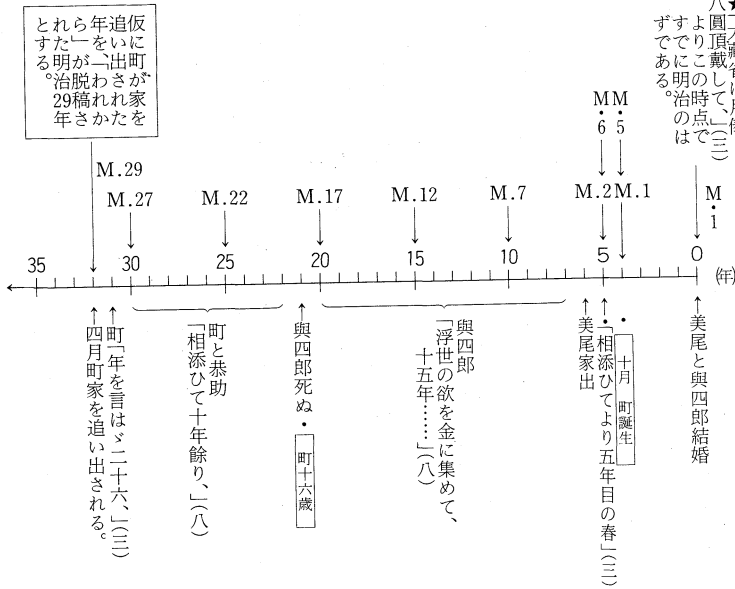
(1) 美尾と一葉の共通点

① 金銭面

夫の與四郎の月給は、「此人始めは大藏省に月俸八圓頂戴して、」(三)より、八円であったことがわかる。次の表は、仮に町が家を追い出された年を「われから」が脱稿された明治二十九年として、年を逆算させたものである。表からわかるように、美尾の家出が明治三年となり、さらに美尾と與四郎が共に生活した六年間を差し引くと、二人の結婚の年が江戸時代(慶応元年)

表

★大蔵省に月俸八圓頂戴して、(三)よりこの時点ですでに明治のはずである。



となる。しかし、與四郎は結婚した時すでに大蔵省に勤めていたことから、明治でなくてはならない。したがって二人の結婚の年を明治元年と推定すると、美尾の家出が明治六年となり、二人の結婚生活の期間が、明治元年から六年頃までの明治初年と推定することが出来よう。当時は、米の十キログラム当たりの小売価格が三十六錢（明治五年）であり、また東京における大工の一人一日あたりの年平均手間賃が五十錢（月給約十五圓）（明治元年）であった。^{（注4）} そのほか、和田芳恵氏が『二葉の日記』^{（注5）}において、明治八年五月改正の「官員録」（東京尾張町西村組出版局發行）より、役人の月給を挙げているが、それを参考にとすると、六等は百五十圓、十等は四十圓、十四等は十五圓であったことがわかる。したがって等外であった與四郎の月給八圓が、かなり低賃金であり、美尾と與四郎の暮らしは決して楽ではなかったはずである。

一葉自身の生活も実際に貧窮していた。次に挙げるように、その様子が一家の戸主らしく、日記に事細かに記されている。

「水の上日記」（明28・5・2）

早朝書あり安達の妻よりかねてのかり金催足の趣き五円斗のなれともいまハ手もとに一錢もなし

「みつのうへ」(明28・5・14)

今日夕はんを終りてハ後に一粒のたくはへもなし
といふ……(略)……師君起て例月の金二円ほと
をもて來給ふうれしもうれし

また、和田芳恵氏が『一葉の日記』の中で、

一葉の一家は月七円ぐらゐの生活をしてゐたやう
である。……(略)……

一人あたり、月二円程度の生活は、当時の物価指
数から見ても、最低の線だ。

とも述べており、美尾と一葉の暮らしは共通して、水
準の低いものであった。

② 衣服

惜しい女に服粧が悪るいなど哄然と笑はれる、
……八圓どりの等外が妻としては是れより以上に
粧はるべきならねども、若き心には情なく(四)

よりわかるように、美尾は贅沢など出来ない生活状態
であることを、重々承知していたはずである。しかし
若く殊に美しい容姿を備えていた彼女には、上等な衣
服を身に付けたいという願望が常にあつたのであろ
う。

日記「身のふる衣まきのいち」(明20・2・19)

人々もん付き給ひぬる中に我一人異やうのなりし
て出ん事あて人のみ給ふ前といひいとほかなし

「蘆中日記」(明27・2・2)

年始に出つきるへきもの、蘆ほとも残らすよその
藏にあつたれば飯そめに出んとするものもなし
邦子のからうして背中と前袖とありさまぐには
ぎ合せて羽をりたにきたらましかばふとハはぎ物
とも覺えざる様に小袖一かさねこしらへ出たり
などの記述より伺えるように、一葉自身の場合も、華
やかな萩の舎の中では、一目瞭然と衣服に差が現われ、
惨めな思いや苦勞が絶えなかつたのであつた。そこで
第四章の美尾が、不覺にも袖を濡らす件には、やりき
れぬ思いがうまく描写されており、萩の舎で味わつた、
まさしく一葉自身の真意が投影された結果であると思
えられる。

③ 「振袖に緋無垢を重ね」

第四章の美尾が與四郎と墨田川へ花見に行き、そこ
で華族に出会う件の描写に、「派手なるは曙の振袖緋
無垢を重ねて、」など、華族の贅沢な着物について描
いている。

日記「水のうへ」(明29・1)においても「江間のよ

し子が妹の七草そめ出したる振袖に緋むくを重ねしかわいのさまもよく」という記述があり、「振袖に緋無垢を重ね」の描写が共通している。また同日の日記には、他の上等な着物を纏った萩の舎の人たちの様子も詳細に描写されていることから、「われから」第四章での華族の描写、また美尾がその艶やかさから、茫然とするところに、一葉自身の思いが込められているとみてよいであろう。

④ 母親に頼られていた

「母親はまだらに残る黒き齒を出して、」(一六) これより美尾の母親が最近までお齒黒をしていたことが伺われ、夫を亡くしてまだ間も無いことがわかる。「美尾は私が一人娘、やるからには私が終りも見て貰ひたく、」(一六) とあるように、美尾は母親にとって唯一人の頼れる身内であり、かつ、心の支えでもあったのである。

一葉の場合も十七歳の時に父親を亡くしており、「水の上日記」(明28.5.1)に、「慈母にむくひ愛妹をやしなはん爲……」と記されているように、一家の戸主として、母や妹から頼られていた。

美尾も一葉も、自身のことだけでなく、家族の幸

せをも同時に配慮しなくてはならない立場にあったのである。

⑤ 「美尾は死にたる物に御座候、」(一七)

これは、美尾が家出をした時に、残っていた置き手紙の内容であるのだが、一葉の「妾」に対する否定的な態度が、「死」という衝撃的な言葉で描出された結果と考えられる。それは、一葉が実際に生活の援助を頼んだ折、久佐賀義孝より妾になることを条件とされ、「水の上日記」(明27.6.9)において、

世のくたれるをなげきてこゝに一道の光をおこさんとこゝろさす我れにして唯目の前の苦をのかる、か爲に婦女の身として尤も尊ぶべきこの操をいかにして破らんや……

と、怒りさえ覚え断っていることから伺われる。

しかしその一葉も現実の厳しさを重々承知していたために、美尾に「現実脱出」を試みさせるには、やはり妾を選ばざるを得なかったのである。美尾がその後、心に傷を負うことは避けられないであろうことから、幸せな生活は得られず、死んだも同然と考えたのである。

(2) 描写方法より

① 美尾の心理描写の省略

家を守り、子育てをすることが使命であった美尾が、夫や子供を捨て妾を選ぶという大胆な行動を取ったことには、計り知れないほどの悩みを常に持っていたはずである。しかし「ぼんやりと空を眺めて物の手につかぬ不審しさ。」(五)とあるような、悩んだり、思案している姿は描かれているにもかかわらず、その苦悩し揺れ動く心理描写は全くされていない。

一方、町の場合は自分から夫が次第に遠避かっていくことを案じる箇所に、心理が読み取れることから、美尾の心理描写の省略は故意に描かれなかったとも考えられる。

美尾と一葉との境遇に類似点が多く、美尾像に一葉自身の姿が、かなり重ね合わされていることは既に挙げた通りである。したがって、一葉にとって美尾の心理は全て自分のことのように承知されており、詳細に描く必要性がなかったのである。

② 與四郎の美尾に対する接し方

美尾が、「お氣に入らぬ物なら離縁して下され、」(四)

と大きな口を叩いていたかと思えば、「貴郎は私をいぢめ出さうと爲さるので御座んすか、」(四)などと言い、與四郎を困らせているが、彼はそのような美尾を責めもせず、さらに一層愛情を注いでいる。また第五章で美尾が與四郎に、夜学に通うなどして出世することぐらい考えたかどうかと、お向う邸の主人と比較した件においても、二人の折り合いが一時悪くなるが、結局互い仲睦まじく暮らしている。與四郎の美尾に対する接し方が異常なまでに甘く感じられ、人物描写の面で、與四郎の影は美尾に比べかなり薄い。これは美尾像に一葉自身の投影部分が多分にあることから、自分を美尾の立場に置き換えてみると、やはり同じ行動を取り兼ねないとし、美尾の態度を否定しなかったためであらう。

(3) 一葉と「現実脱出」

塩田良平氏は「一葉の一生とその意義」の中で次のように述べている。

彼女の地位や權威に對する反抗心は、後にこそいろいろ合理的な口實をつけられてゐるけれど、その根源は萩の舍社中で養はれた劣等感の意識から成長したといつて差支へない。(『樋口一葉研究』)

第七章第四節 昭31・10・15 中央公論社

また、良家の令嬢達の集まりであつた萩の舎での一葉の待遇は田邊夏子氏の『一葉の憶ひ出』

馴れて來てから、みの子さんと私の平民組と一緒に、會の時は茶菓をはこぶ手傳ひはしました。

『一葉の憶ひ出』昭25・1・1 潮鳴會

からも察せられる。洗い張りや、賃仕事、また金策に奔走し、日々の生活を支えなくてはならない一葉ではあつた。しかしたとえその時点では没落していたとしても、「士族」であり、後に「官員」となつた父を持っていたために、ある種の優位感が養われていたのである。したがって、彼女にとって萩の舎は屈辱の場であつた。そのうえ、日記「塵之中」(明26・8・10)の記述、

かくて九つ斗の時よりハ我身の一生の世の常にて終らむことなかはしくあはれくれ竹の一ふしぬけ出てしがなとぞあけくれに願ひける

に見られる、幼少の頃より「世の常」では終わりたくないという非凡な理念が、「現実脱出」の引金を引く要因となつたのである。「水の上につ記」(明28・5・10)には、その一葉の嘆きの全てが集約されている。

わが身ハ無學無識にして家に産なく縁類の世にきこゆるもなしはかなき女子の一身をさ、けて思ふ

事を世になさんとするともこゝろに限あり智惠の極ミしるへきのミ

「思ふ事」の達成が無理であつたため、その夢を作品中でかなえようとしたのであらうが、

二葉の新芽に雪霜のふりかゝりて、これでも延びるかと思へるやうな仕方に、堪へて眞直ぐに延びたつ事人間わざには叶ふまじ、(「ゆく雲」(中)『太陽』明28・5)

という当時の社会では、その底辺で生きる女性にとつて、妾のみしか「現実脱出」を成し遂げる道は結局なかつたのである。

古屋しづゑ氏が「樋口一葉の女性観」の中で次のように述べている。

一葉の描いた女性は何れも多かれ少なかれ彼女自身身あらわれであつた事は否定出来ないであらう。一葉自身のある面が、意識的、無意識的を問わず、にじみ出ているのである。(『近代文学攷』

昭28・8)

先に挙げた美尾と一葉との共通点や、描写の特徴、また一葉自身に「現実脱出」を考える要素が備わっている点、そのうえ「現実脱出」は「雪の日」「にぎりえ」「わかれ道」と、「われから」以前より試行錯誤を繰り返

返し取り組んできた問題であること。したがって以上より、美尾の「現実脱出」には一葉の望み、つまり常並で終わることに満足出来ず、思う事を達成させたいという願いが込められていると言えよう。しかし結局は妾になるという不完全な方法で止まり、諦めと嘆きの域を脱し得ていないのである。

四

次に本章では、「不幸の結末」と一葉との関連性について考えてみたい。

(1) 町と一葉の共通点

① 町は父や婿からの真の愛情を受けることもなく、終には婿によつて自分の家から追い出され悲劇的な運命を辿っている。この町の「不幸な結末」の原因は、母親の美尾の自分本意な家出、つまり「現実脱出」である。

一葉の場合、父の則義が生前始めた事業（荷車請負業組合）の失敗が原因となり、父の死後、許婚の渋谷三郎から婚約を一方的に破棄され、また負債の取り立てに追われ苦しい生活を強いられた。塩田良平氏は「荷

車請負業組合の失敗と没落」の中で次のように述べている。

則義の最後の野心を燃え上らしめ、しかも樋口一家を悲境に陥れる誘因となつたのである。……

（略）……彼ほど慎重に事に處して來た男が、茲に至つて心を動かしたといふことは、やはり妻子を抱へて、職を失つた焦躁感に釣られたからであらう。（『樋口一葉研究』第三章第三節二昭31・10・15

中央公論社）

また、塩田氏は則義の事業について、「最後の一旗を挙げようとした」とも述べている。則義の行動は、警視庁退職後の焦りから、家族のために生活の向上を望んだ結果であつた。まさしくこれは、「現実脱出」を試んだのであり、美尾の「現実脱出」の動機、また「われから」に至るまでの作品に見られた「現実脱出」の動機と同様である。したがって一葉が身にしみて味わつた不幸も「現実脱出」によつてもたらされたものと言える。

② 限りも知れず廣き世に立ちては耳さへ目さへ肥え給ふ道理、有限だけの家の内に朝夕物おもひの苦も知らで、唯ほんやりと過します身の、（九）

この町の言葉は、精力的な活躍をする夫の恭助と、世

間見ずで視野の狭い町との違いを訴えたものであることは言うまでもない。しかしこの言葉には、当時の社会における、一般的な男女の立場の違いが同時に訴えられているとも考えて良いのではないか。女性の使命は家を守ることと考えられていた当時に、女の身で何か思う事を成し遂げることは、至難の業であったはずである。一葉の「雑記2（無題その二）」「嗚呼是を如何せん」の中で彼女は次のように記している。

眞に同權たらんとする一あり豈只文醫工商の類ならんや如何なる物と問ハ、答へん子の教育即ち是也女子のつとむべき只是一事あるのみ……（略）……當今の風説そも是々をいかんせん

また、「塵中につ記（明27・3）」では、「かひなき女子の何事を思ひ立たりとも及ふまじきをしれと」と述べている。若い女の身で一家の戸主となった一葉にとって、男女の立場の矛盾は常日頃より殊に感じていたはずである。したがって先に挙げた町の言葉は、町の訴えと同時に一葉自身の訴えとしても読めるのである。裕福に暮らしていた町と、生活に窮していた一葉との間には、生活環境の違いから、美尾との間に見られたほどの関連性は見られないが、以上二点の共通点が挙げられる。よって町にも一葉の姿が反映されている

と言えよう。

(2) 一葉と「不幸な結末」

父親の「現実脱出」のために、母親と妹を抱え苦しい生活を送っていた一葉の夢は、貧窮からの一日も早い脱出であったはずである。しかし先に述べたように、女の身で生計を立て家族を養うことは、なかなか困難なことであった。一葉が幼少の頃より世の常では終わりにたくない、という理念を持っていたことは、先に美尾と一葉との共通点で取り挙げた通りである。その非凡な彼女であったからこそ、苦境に立たされた自分の身の不幸を、殊さら感じていたと思われる。

町の「不幸な結末」には、実際にその不幸を経験した一葉の嘆きが描かれている。つまり一人の思う事の無理な実行（「現実脱出」）による何らかの反動を受け、そこから逃れるために努力を重ねたとしても、女であるがゆえに如何なる方法も良い解決策とはならない。そして結局悲劇的な運命を辿らざるを得ないことである。

五

美尾と町の部分をそれぞれ読み比べてみると、両者

の因果關係を描写する上での効果を一層高めるために、一葉がかなり工夫を凝らしている箇所が伺われる。

その一つは、「身分は高からずとも誠ある良人の情心うれしく、」(四)とあるように、美尾は経済的なゆとりは得られなかった反面、夫の愛情を多分に受けることが出来た。それに対して町の場合は経済的に恵まれており、美尾が日頃望んでいた贅沢な生活を思う存分楽しんでいたのである。しかし、

父の與四郎在世のさまは知り給ふ如く、私をば母親似の面ざし見るに癩の種とて寄せつけも致されず、(九)

とあるように父親の愛情を受けることが出来ず、さらには夫にも捨てられ、心のよりどころは得られなかった。このように両者を全く対照的に描いている点が興味深い。

次に、美尾は自分の幸せだけを求め、夫や娘を裏切つてまで妾を選び「現実脱出」を実行した。それに対し、町は不義の噂だけによって婿に家を追い出されてしまっている。美尾が他の男性のもとへ出奔したこと、つまり男女關係の罪を犯したことの見返りとして、結局町が男女關係により、たとえそれが事実に反するものであったとしても、不幸に陥れたのである。こ

こで注目したいのは、町の夫の恭助が女性を囲い子供まで儲け、男女關係の罪を犯していることで、それが全く問題にされない点であり、一層町の運命の悲劇性を高めていることである。

また、町が「夫れは孰れも取止めの無き取こし苦勞で御座りませうけれど、」(九)と言いながらも、「私は貴君に捨てられは爲ぬかと存じまして、」(九)と自分の身の行末を案じているところに、夫と娘を捨てた美尾との運命の一連性が感じさせられるのである。

「現実脱出」と「不幸な結末」、この相関し合う二問題が一連のものとして描かれ、その問題それぞれに關係する美尾と町の両者に重点を置くため、等分に描く構成がとられた。

したがって「われから」が「一葉としては太く劣りたる作」であるとは、必ずしも言えないのである。

(注)

(1) 『国文学解釈と鑑賞』 昭49・11

(2) 『国文学解釈と教材の研究』第2巻第11号 昭32・10

(3) 『値段の明治大正昭和風俗史』を参考週刊朝日編

昭56・1・30 朝日新聞社

(4) 『一葉の日記』1983・1・20 福武書店

(5) 「塵中日記」の「塵」は正しくは「塵」であるが、「塵」は草書のくせによって書かれたもの……」として「塵」のまま掲げた筑摩書房『樋口一葉全集』によった。

(6) 『樋口一葉研究』第三章第三節一 昭31・10・15 中
央公論社

(7) 正確な記録年代はわからないが、筑摩書房『樋口一葉全集』第三卷(下)「雑記2(無題その二)」の(補注)には、次のような記述がされている。「記録年代を推定する鍵は、「女徳も又表へたる哉」「嗚呼是これはいかんせん」「嗚呼是を如何せん」の見出しで書かれた評論の三つの推敲と、……(略)……。「女徳も又表へたる哉」の後半の末に「駿台の東鹿に記」と奥書がある。文章が東京高等女學校事件に言及しているので、二十二年六月以後九月までの間に記入されたと考えられる。」